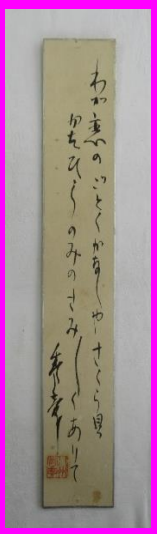
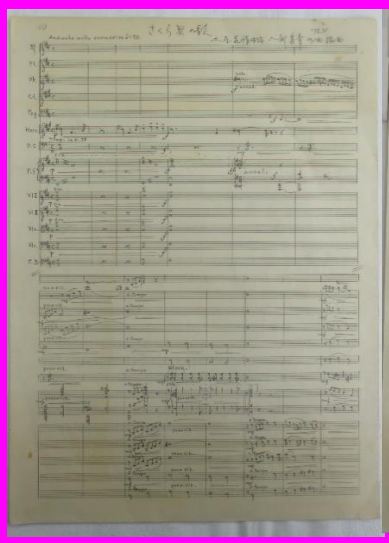
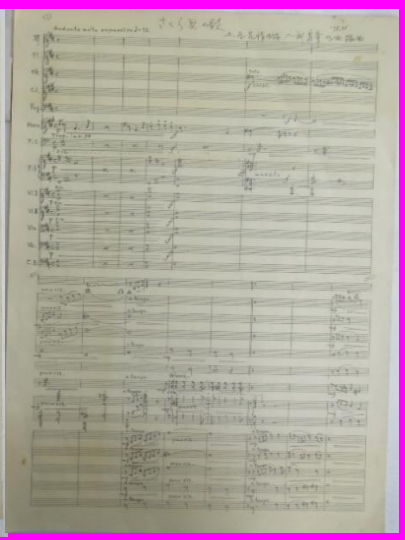
資料名	八洲秀章作曲【さくら貝の歌】	区分	短冊、楽譜、レコード

写真・スケッチ

【短冊（直筆）】　【楽譜（直筆）】　【レコード】







説　明　（商品名，製造所，使用方法，歴史，時代背景　など）

短歌：さくら貝の歌　（昭和十五年由比ヶ浜にて）

「わが恋のごとく　かなしやさくら貝
　　かたひらのみの　さみしくありて」　　秀章

歌謡同人誌に詩を発表する土屋花情（つちやかじょう）の作品に興味を持った八洲さんが「一緒に作品を作りたい」と土屋氏を訪問し、昭和十四年秋、神奈川湘南の浜で、寂しげな片ひらの「さくら貝」を目にし、二人はさくら貝のその可憐な姿に初恋の想いを託し、名曲「さくら貝の歌」が作られました。この曲のモチーフとなったのが八洲氏が作った歌（短歌）です。

八洲さんの初恋は、昭和9年頃、真狩村の学校で顔を合わせた4歳年下の女性だったといいます。オルガンを弾きながら二人で語り合い、大ケガで前途を悲観していた八洲さんをそれとなく励ましてくれる乙女心が無性に嬉しく、運命の初恋と感じたそうです。

作曲家を目指して、上京する際（21歳時）にも「自分は立派な音楽家になって、きっと君を迎えに必ず来ます、それまで元気でいて下さい」と、心の中でひそかに誓ったといいます。

しかし、上京から2年後の昭和13年に、本当に好きだったという初恋のその人が胸を患って十八歳の若さで亡くなりました。八洲秀章というペンネームは、初恋の人の俗名と法名から一字ずつをとってつけたそうですが、その理由は、初恋の人を生涯忘れ得ぬ思いからだといいます。

この歌は、そんな初恋の人を想い、かたひらのみのさくら貝と自分を重ね、寂しさや悲しみといった初恋の人への惜別の想いを綴ったのではないでしょうか。

「さくら貝の歌」が日の目を見たのは、曲が完成してから十年後の昭和24年「ラジオ歌謡」で放送されてからといいます。さくら貝の歌が作られた当時は、戦時下で、テイチクレコードから菅原都々子さんの歌声により吹き込まれたそうですが、「この歌は時期ではない」との判断でお蔵入りとなり、その後の工場火災で原盤も焼失したそうです。

ラジオ放送で歌ったのは小川静江、レコードは辻輝子さんが歌い、ヒットとなったそうです。戦後、美しいものを求める人々の心に、この歌は静かに共鳴を受け、歌われ、八洲先生は、この歌で作曲家としての地歩を固めたといいます。

さくら貝の歌

作詩　土屋花情
作曲　八洲秀章

一
美しき　さくら貝一つ
去り行ける　君にささげん
この貝は　去年の浜辺に
われ一人　ひろいし貝よ

二
ほのぼのと　うす紅染むるは
わが燃ゆる　さみし血潮よ
はろばろと　かよう香りは
君恋うる　胸のざざなみ

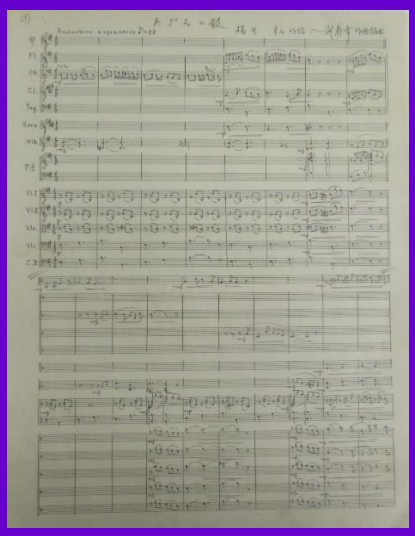
あゝ　なれど　我が想いは儚なく
うつし世の　なぎさに果てぬ

出　典　：　下山光雄著：さくら貝の歌　八洲秀章の生涯

資料名	八洲秀章作曲【あざみの歌】	区分	楽譜、レコード

写真・スケッチ

【楽譜（直筆）】



【楽　譜】

【レコード】

説　明（商品名，製造所，使用方法，歴史，時代背景　など）

八洲先生の代表曲の一つともいえる「あざみの歌」が完成した背景には、歌詩との不思議な出会いがあるといいます。

戦後間もなく、家族を抱え生活に余裕がない頃、レコード会社で守衛を兼ね一人で起居していた時に、若い事務員さんから小さな紙片に記された詩を見せられ、それを見た途端、メロディーが浮かんだといいます。それはかつて、黄昏の夕べに街を歩いていたら、美しいモンペ姿の若い女性が立っていて、その顔は白く輝いて、先生の中に曲想が沸いて、そのまま寝ずに一夜で書き上げたものでした。その曲は故郷の白百合の花のイメージで、あざみの歌の詩は、その時のメロディーにピッタリと重なったので、白百合を「あざみ」に変えて、名曲「あざみの歌」が誕生しました。数日後、若い事務員に曲を聞かせたら急に涙を浮かべたといいます。作詞者のことを聞くと、つい最近まで、1カ月間ほどアルバイトに来ていた横井弘さんだといいます。横井弘氏は東京育ちで、終戦後、信州諏訪湖畔で三十編ぐらいの歌謡詩を作りますが、その中の一つが「あざみの歌」でした。

八洲先生と横井氏との出逢いは昭和24年の春、日本音楽著作権協会の一室で、「あざみの歌の詩に曲を付けたので、NHKのラジオ歌謡にしたいと思うのですが、どうでしょう」と声をかけたところ、横井氏の「よろしくお願いします」の一言で、抒情豊かな名曲がラジオの電波にのって全国に流れました。昭和26年に伊藤久男さんの歌でコロムビアからレコードが発売され大好評を博したといいます。

「あざみは、野生のたくましさと清らかさ、そして情熱と哀愁とを秘めて咲く、乙女の花だ。雑草の中に紅い燃ゆるその姿の美しさ、あでやかさは、一際に風情がある。あざみには、深山あざみ、山あざみ、野あざみ、花あざみ、ドイツあざみ、そのほか数十種類もあると聞くが、それにもまして美しい人の花の、あざみを連想させる乙女子のいかに多きことか・・・・・。野生美と知性美が程よくミックスされていて、清潔、高雅、真摯、憂愁、情熱の感じられる人を見かけると、私は胸にときめきを覚える。私へのファンレターは、あざみの歌に関したものが多く、その中には非常に感激させられたり、感動されるものが幾通かあって、私はそれらの書簡を、宝物のように大切に保存している。あざみの歌を作ってから、既に十数年の歳月を経たが、年と共に多くの人々に愛唱されていることは、作曲家として誠に喜びに堪えない、そして自分の使命を痛感する。

私もあざみの如く、清らかに逞しく、美しく生きるとともに、より良き歌の創作をひたすらに念願している。」と、昭和38年7月20日発行の「うたごえ　三号」で、あざみの歌について語っています。

あざみの歌
作詩　横井弘
作曲　八洲秀章

一
山には山の　愁（うれ）いあり
海には海の　悲しみや
ましてこころの　花ぞのに
咲しあざみの　花ならば

二
高嶺（たかね）の百合の　それより
も　秘めたる夢を　ひとすじに
くれない燃ゆる　その姿
あざみに深き　わが想い

三
いとしき花よ　汝（な）はあざみ
こころの花よ　汝はあざみ
さだめの径（みち）は　はてなくも
香れよせめて　わが胸に

出　典　：　下山光雄著：さくら貝の歌　八洲秀章の生涯